特集

ふるさと納税のこと知ってますか？

テレビなどでもよく話題になっている「ふるさと納税」。曽於市でも、平成26年度から本格的に「曽於市思いやりふるさと寄附金」として取り組みを開始しています。その寄附金は、どんな形で曽於市に還元されているのかなど、改めてお伝えします。

そもそもどんな制度？

寄附を通じて地域振興に参加できる制度のこと。自分の故郷や思い入れのある地域など、好きな自治体に寄附を行うことで、その地域の活性化に参加でき、寄附したお金の使い道を指定することも可能です。

ふるさと納税は、自分の選んだ自治体に寄附を行うと、控除上限額内の2千円を超える部分について税金が控除されます。

なんでできたの？

この制度がスタートしたキッカケは、都心と地方の税収格差。

地方で生まれ、その自治体から医療や教育等様々な住民サービスを受けて育っても、進学や就職を機に生活の場を都心に移す人が多くなっています。そうすると、税金を都心の自治体に収めることになり、生まれ育った故郷の自治体には税収は入りません。

そこで「今は住んでいなくても、自分を育んでくれたふるさとに自分の意思で納税できる制度」としてふるさと納税が生まれました。

自治体にとってどういうもの？

ふるさと納税があることで、寄附された税収が市の貴重な財源になり、様々な事業に充当できます。

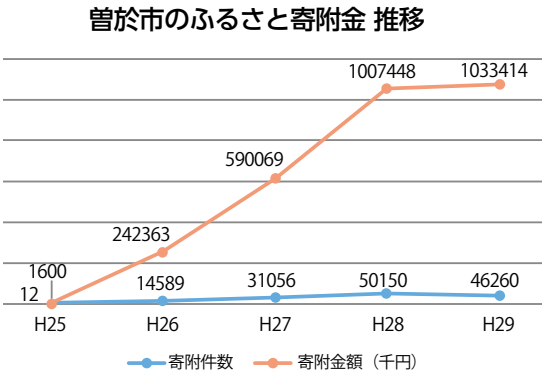
他にも、市として全国的なＰＲになること、地元事業者との連携などを行うことでのブランド力のアップ、返礼品のための生産増加による雇用や設備投資の増など、市だけではなく、市内事業者にとっても、利点が多くあります。

年に数回、事業者向けに文章や写真のＰＲ方法などを知ることができる講演会も行われ、市内事業者同士の交流の場になっています。

曽於市はどんな感じ？

曽於市で、「曽於市思いやり寄附金」が始まったのは、平成25年度。この年の寄附件数はわずか12件でしたが、翌26年度から本格的に取り組み、その年は鹿児島県で一位の寄附金額となりました。その後も寄附金は増額し続け、平成28年度、29年度は2年連続で10億円を突破しました。

現在、平成30年度は36もの事業所にご協力いただき、返礼品は約250品目にも上っています。



どんな人が寄附してる？

曽於市に寄附してくれている人のほとんどが都心在住。一番多いのは東京都で、その後、神奈川県、大阪府、愛知県と続きます。

何が人気かというと、やはりお肉。黒毛和牛のロースステーキや黒豚しゃぶ肉とのセットなどが選ばれています。他にも、鰻や焼酎、マンゴーなども人気です。

どんなことに使われてるの？

ふるさと納税で寄附されたお金は、最初にも書いた通り、寄附した人が使い道を指定することができます。曽於市で指定できるのは、

(1) 活力あふれるふるさとづくり
(2) 少子高齢化および定住対策
(3) 福祉および医療
(4) 教育、文化およびスポーツ振興
(5) 地場産業の振興
(6) 環境整備の振興

に関する6つ。寄附金は基金として各事業ごとに振り分けられます。

例えば、在宅医療や医療相談サービスなどに使われる「地域医療支援費」、空き家の改修補助などに使われる「定住促進対策事業」、「特産品PR推進」や「出産祝い金」など、希望された使い道に沿って、さまざまな事業に充当されています。

青少年育成

青少年リーダー研修 in 屋久島など育成の機会を提供する

都市公園管理

新地公園グラウンドゴルフ場の整備および管理運営を行う

学力向上支援員配置事業

個別指導の充実を図り児童生徒一人一人の学力向上を図る

納税する側ではなく、受け取る側、つまり曽於市にとって市民の皆さんにとっての《ふるさと納税》。身近に感じていただけたでしょうか？ 次のページからは「企業にとってのふるさと納税」をお伝えします。

企業誘致・企業創業促進対策

工場設置により地域の雇用促進や企業人材の育成などを図る

間伐・再造林および下刈促進対策

山を管理していくために必要な整備に関する事業補助金

企業にとっての「ふるさと納税」

ふるさと納税は、自治体のためだけでなく「地元事業者」のためにもならなくてはいけません。そんな地元事業者にとって、「ふるさと納税」はどんな存在なのか、聞いてきました。

大成畜産
営業統括マネージャー
大成 三千子 さん

営業担当みたいなものです

大隅町にある大成畜産は50年以上前に広島で創業し、黒豚をやりたいと、33年前に曽於市に移住。現在では約3万頭の豚をメインに6つの農場で育てている。

「うちは農家で大きな会社ではないので、営業や宣伝っていうのは次の次の次くらい（笑）。それを市が無料でやってくれるなんて、本当にありがたいお話です」と話してくれたのは、道の駅おおすみ弥五郎伝説の里にあるレストラン「やごろう亭」と販売を担当している大成三千子マネージャー。

「商品の写真撮影、ネットや冊子でのPRなど、ふるさと納税を通して、本当にいろいろとやってくださいます。取り上げてもらうことだけで本当にうれしいです」

PRのやり方や、撮影などに専門的知識があるわけでも、専属のスタッフがいるわけではない。だからこそ、こうして全国的なPRになる「ふるさと納税」はとてもありがたいそう。

「うちもホームページがあって、ネット販売もやってますが、小さな養豚農家のページはわざわざ探してもらわないと、見つけられないですよね。だけど、ふるさと納税でうちを選んでくれた方が、そのあと直接注文してくださることもあるんです。だから、ふるさと納税はうちの営業担当であり、宣伝担当ですね（笑）」

大成畜産のブランド豚「やごろう豚（どん）」でつくられた手づくりウィンナーは人気商品のひとつ。添加物は一切使用せず、やごろう豚と玉ねぎ、塩、香辛料しか入っていない天然素材100％のウィンナーだ。

「小さい企業だからこそ、こだわることができるし、少ないロットで新鮮なものをつくることができる。ふるさと納税の返礼品の中でも、お肉ってたくさんあるでしょう。だけど、大きな企業ができないところを補う。そうやって共存していけると思います」

そのこだわりは、ふるさと納税に限ったことではなく、企業としての理念に近い。レストランでは、やごろう豚を使うのはもちろん、卵やお米、れんこんなどの野菜も自社でつくっているものを使っている。

「PRしてもらうからには、良いものをちゃんと作る。それがわたしたちの仕事だと思っています」と話してくれた。

大成畜産の「やごろう豚」やウィンナーなどの加工品は道の駅おおすみの農土家市で買うことができる

企業にとっての「ふるさと納税」

メセナ食彩センター
工場次長
木原 貴之 さん

全国にPRする貴重な機会です

末吉町にあるメセナ食彩センターは、平成9年に設立され曽於市産ゆずの搾汁や加工品の製造などを行っている。ちょうど今の時期、ゆずの収穫はピークを迎えており、栽培面積が93ヘクタールもあるという曽於市では1000トン近いゆずがとれるという。

「ここまでゆずの栽培が盛んになったのは、旧末吉町役場の新庁舎落成記念に末吉全戸に苗木を配ったのが始まり。その時に、農家さんに試験的に栽培をしてもらい、その後、本格的に栽培に取り組みました」と話してくれたのは、工場次長である木原貴之さん。

「曽於市にはたくさんの農産物があります。その中でもゆずは栽培面積が九州で一番なんですが、なかなか地元の人でも知らない人がいます。だから、このふるさと納税というのは曽於市のゆずをPRできるとても良いチャンスなので、ありがたいですね」

鹿児島ブランド、曽於市ブランドの中でゆずを見てもらえるという、有利な状況でPRができる。まずは商品を知ってもらえたら嬉しいと話す。

「ふるさと納税の中で、ナンチクさんの商品には、うちのゆず胡椒やしゃぶタレをセットにしてもらっているのもあります。少しでも知ってもらうキッカケが増えるっていうのはありがたいですね」

自社のふるさと納税の返礼品はゆず製品がずらっと並ぶ。

ゆず製品は曽於市内のAコープやマックスバリュ、各町の道の駅などで購入ができる

「うちはゆずしかやっていないので（笑）。商品も少しずつですが、新商品を開発し、今では約30アイテム程になりました。ドレッシングも4種類になっています。フレンチ玉ねぎドレッシングは、から揚げなんかにも合うんです」と教えてくれた。

農家との連携、ゆずの搾汁、ゆず畑の管理、商品の製造や開発…ゆずのプロフェッショナルとして、さまざまな場面がでてくる。

「無農薬のものが欲しい、果実のまま納品してほしいなど、ありがたいことにたくさんの問い合わせをいただきます。《曽於市のゆず》の価値があがるように、農家さんとも一緒に、できることをやっていきたいと思います」

「ふるさと納税」が身近なものになったでしょうか？ 今年度は、寄附金額15億円を目指して、今日も頑張っています。